

普及活動情勢報告（平成20年1月分）

J A土佐あき柚子部役員会 ～新しい年度に向けて～



1月17日、J A土佐あき柚子部5支部の役員、事務局、関係機関が集まり役員会が開かれた。会では、19年度作の販売・栽培の反省、部会の事業の取組み、果汁販売の一元化と北川搾汁場の改築等が検討された。

振興センターからは、19年度作の反省とこれからの農作業についてと先日農政局を招き勉強会を行った時の新たな果樹対策事業の説明をし、積極的な活用を求めた。また、北川搾汁工場の改築では、果汁販売一元化への一つの取組みとして、部会、J A全体の問題としての検討がなされ、JA 柚子部の取組課題となったことは、まとまりのある産地への姿として大きな前進であった。

ナス部会の開催



「わかりますか。」講義風景

12月26日、安芸集出荷場研究会ナス部会に於いて「厳寒期の温度管理」「葉面散布の施用及び効果」、「ピッチング対策」を題目に現地検討会及び研修会を開催した。これはナスの研究会活動をよりよく実践していくため振興センター、JA、研究会が計画的に実施しているもので、今回で2回目。約35名の参加者がみられた。現地検討会では、施肥による品質への影響や、天敵昆虫活用による病虫害対策を、研修会では低日照期の樹勢の回復方法として、葉面散布の効果等について講義を行った。生産者からは『施肥管理などで価格の高い肥料を使ってきたが、安い肥料をうまく使い分けることでいい管理ができるがや』、『天敵で害虫をうまく抑えてきている』などの声も聞かれ有意義な会となった。いままで参加しなかった生産者の姿がみられた。今後とも継続して研究会活動への支援を図っていく。

出荷場で営農相談～地道な取り組みもやっています！～



営農相談風景

1月17日に安芸出荷場でJ A土佐あきの営農指導員と協働して、営農相談を開催した。毎月ナスの日（17日）に開催しており、今回で3回目。農家が持ってきた土や土壌養液の簡易な分析や栽培管理、病虫害防除などの相談に乗っている。また、部会研究会に来られなかった人に資料を手渡しし、一声掛けて栽培状況を聞きながら、情報交換も行っている。地味な取り組みであるが、農家が「この前の資料は参考になった」と言ってくれたり、反応も良くなってきている。このような活動をつうじて、農家とのつながりを再構築しながら、部会参加へつなげていけるように取り組む。

第2回男女(とも)に手を携えてのつどいの開催



女性リーダーと青年農業士がそーれエイド助成事業を受け、昨年に引き続き「男女(とも)に手を携えてのつどい」を1月18日に開催した。内容の企画検討については実行委員会を4回開催し、テーマは「我ら、土佐野菜応援団」とした。つどいでは、RKC調理師学校三谷校長から「日本の食文化・野菜が大切」、「世界に誇れる日本の食に野菜が重要な位置を占めている」と講演、青年農業士からは「時代はIPMからIBMだ」と芸西村エコ農業研究会の活動報告があった。毎年好評の土佐野菜ビュッフェも野菜ソムリエからナス料理2品の作り方と女性リーダーによる「ナス丼」、タイガースメニュー「ナスのトラボナーラ」の試作とナスの新たな食べ方が紹介された。

ユリ部会の活動



オリエンタル通信

J A土佐あきユリ部会(10名)では、目慣らし会や定期的な現地検討会を開催し、部会員相互の意見交換を大事にし、安定した品質のユリ生産に向けた活動を行っている。安定した品質のユリを栽培するため、生理障害の発生をおさえるよう取り組んでいるが、使用品種・栽培管理・圃場条件等によって、どこかに発生が見られている。

振興センター担当者・J A営農指導員は、生理障害に影響する条件のひとつである圃場条件を検討するために、栽培終了後の圃場の断面調査を始めた。実際の調査を、農家にいっしょに見てもらった。その調査結果を、振興センター・J A担当者が、会報「オリエンタル通信」に掲載し、部会員で情報共有を行った。

1月11日・15日に開催された現地検討会では、各ハウスの生育状況を見ながら、現在の温度設定をどのように行っているのかについての話題を中心に意見交換を行った。